

家庭教師も楽じゃない

武藤 由佳（むとう ゆか）は女子大生の家庭教師であった。

普段は中堅の国立大学に通い、サークルや飲み会の合間を縫って、お金稼ぎのために家庭教師のバイトをしている。家庭教師のバイトを選択したのは、ただ楽そうだったからという一点に尽きる。別に将来に向けて刻苦勉励する学生のために力を尽くそうなんて崇高な理念は持ち合わせていなかった。友人からの「家庭教師メッチャ楽だよ。ただ問題解かせて、分かんないところはテキストの答え見ながら教えればいいだけだし。ドジなあんたでも多分よゆうだよー」という言葉を鵜呑みにしたに過ぎなかった。

そして、実際に家庭教師は実に楽なバイトであった。由佳が教鞭を執っているのは〇学生の男の子で、名前を深山 駿（みやま しゅん）というのだが、彼は類稀に見る卓越した頭脳の持ち主で、もはや由佳が教えるようなことなどにもなかったのだ。得意とする英語を始め、数学、理科、社会、などなど、駿はほとんどの教科で高得点を獲得していた。逆に由佳に間違いを指摘することすらあった。

だから、由佳ができることと言えば、駿の出来の良さを褒めることくらいであった。家庭教師としての職務を果たしているかと言えば、かなり際どいラインであろう。

とはいえ、由佳の存在が駿のモチベーション上昇に貢献しているのもまた真であった。端的に言えば、由佳は駿に恋慕の情を寄せられていたのだ。それも、由佳の美貌と〇学生男子の女性に対する関心から鑑みれば不思議な話ではない。由佳は非常に魅力的な女性であった。成人にはとても見えない幼気な顔貌は薄めの化粧で彩られ、小動物のような可愛さに大人の色香が加わった最高の形で完成されていた。ゴムで結ばれた後ろ髪は彼女の可愛らしい仕草と共に揺れ、魅惑的な芳香を惜しげも無く放つ。地味めな黒スーツ姿も豊満なそのスタイルを以てすれば男の理性を破壊する艶麗な衣装として機能し、ベージュのストッキングに包まれた美脚は強烈な曲線美によって視線を釘付けにしてしまう。女性経験の少ない駿が魅了されてしまうのも無理からぬ話であった。

さらに、由佳の過剰なボディータッチも駿を誘惑する一要素と化し

ていた。もちろん、由佳からすれば勉強のできる駿を褒めるための何気ない動作なのであるが、駿からすればたまったものではなかった。頭を撫でる優しい手つき、鼻を掠める香水のいい匂い、時折触れる豊かな胸の感触。心臓の音は高鳴り、どうしようもなく股間が熱くなる。指導を受けている際に駿が思考を巡らせていることといえば、目前の問題を処理することではなく、自身の勃起が由佳に露呈しないかどうかということであった。由佳の良かれと思った行動は彼にとっては少々刺激が強過ぎたのである。

そして、今日も今日とてお勉強の時間が始まる――

「おじゃましま〜す」

由佳はいつも通りに扉の鍵を開け、深山家に足を踏み入れた。

駿の家はいわゆる母子家庭であった。駿の母親は普段から働きに出ていて、帰宅するのはいつも深夜になってからであった。彼女が家庭教師を雇ったのはさらなる学力向上のためではなく、自分が仕事をしている間に子供の世話を見てもらうという意味合いもあった。その点から、駿と中々の信頼関係を築いている由佳は母親からすれば優秀な家庭教師そのものであったのだ。家庭教師として一目置かれた由佳は深山家の合鍵を渡されており、出入り自由という権利を得ていた。また、家がそこそこ近いということもあり、家庭教師としてだけではなく、近所のお姉さんとしても、由佳は駿の世話にあたっていた。

「……ムムツ」

靴を脱いだ由佳の鼻を掠めたのは、香ばしく甘い香りであった。彼女はくんと鼻を鳴らしながら匂いの出処を探し、それが居間から放たれていることを突き止めた。そして、躊躇なく襖に手をかけた。

「やあっ！」

可愛らしい掛け声と共にガララと襖を開ける。由佳の目に飛び込んだのは、リビングテーブルの上の皿に乗せられたいくつかの焼き芋――そして、それを頬張りながら驚愕の表情でこちらを見つめる駿の姿であった。

「わあっ、焼き芋じゃん！ やったあ！」

駿の反応なぞ気にも留めず、由佳は自分の分の座布団を引き、その上に座ると、焼き芋を手にとって頬張り始めた。そして、その甘美な味わいに頬を綻ばせた。

「おいひい〜。やっぱこの季節は焼き芋だよ〜」

「……いや、由佳さん。焼き芋だよね〜、じゃなくてさ」
呆れ顔をしながら駿は言う。

「なにさ、なんか文句でもあるの？」

「あるよ、大アリだよ。なんで勝手に入ってきて僕の許可なく焼き芋を食べ散らかしているんだ」

「そこに焼き芋があるからさ！」焼き芋を掲げながら由佳は言う。

「いや、全然理由になってないから」

「も〜、そう固いこと言わないでよ〜。いいじゃん、焼き芋の一つや二つや三つやくらい」

「全部食べるつもり！？ これ、僕のおやつなんだけど」

「駿くんは今から勉強！ ほら、はやく勉強道具持ってきたな」

「ええっ！ なんてだよ。焼き芋食べてからでいいじゃん」

「私はえらいえらい先生だから、時間には厳しいのだ。大丈夫。焼き芋は全部私が食べてあげるから〜」

由佳はそう言っ、大きな口で焼き芋にかぶりつく。大人としての体裁など欠片もなく、焼き芋を全て略奪するつもりであった。

「くそっ、母さんがいないからってやりたい放題かよ……」

「ふふん、私は駿くんママからこのウチの家族同然ってくらいの信頼を得ているからね。君がなんと言いつけようと無駄なのさ。ハッハッハア！」

「なんてズルい大人なんだ」

「大人はみい〜んなズルいんだよ。悔しかったら駿くんも早く大人になるんだね。ま、ともかくこの焼き芋は全て私のものじゃあ！ はぐはぐ……うう〜ん、んま〜い！」

「……そんなだから彼氏ができないんだよ」

駿はぼそりとそう言った。

「……オ？ なに？ なんつったの？ よく聞こえなかったな、駿くん。もっかい言ってみ？」

「べ、勉強道具取ってくるね」

由佳の顔が般若と化しかけたのを見た駿はそそくさと居間から出て行った。

「ふんっ、いいもん。別に彼氏なんていらないし。私の彼氏は美味しい食べ物なのさ」

と言いつつ、ぷりぷりと怒りながら由佳は焼き芋に手を伸ばすので

悪化、これでオナラが臭くならないわけがない。

由佳は周囲を手で扇ぎながら、この悪臭をどうするかを考える。もし、自分が出た後に駿がこのトイレに入れば、醸成された強烈な腐敗ガスを嗅がれることは確実であった。自分の教え子に『オナラの臭い女』とレッテルを貼られるというのは看過できる事態ではなかった。

とはいえ、この濃密なニンニク臭を隠蔽できる方法は現状では皆無であった。強力な消臭剤等があればまだ可能性はあったろうが、そんなものはどこにもない。由佳は苦肉の策として、手で扇いで臭いを散らしたり、涙を滲ませながら自分の香りを吸収したりして、ほんのすこしばかり悪臭を緩和させる。

結局、由佳は自分のオナラの臭さを嘆きながらトイレを後にした。

(いやあ、それにしても危なかった危なかった)

襖を開け、リビングに足を踏み入れながら由佳は思う。

(私はすっかりもののお姉さんだから、駿くんの前でオナラなんて下品な真似はできないわ。ましてやそれが滅茶苦茶くっさいなんて知られちゃったら、もう顔向けなんかできないよ。オナラ、ダメ絶対)

由佳はそう自分を戒めながら駿の隣の座布団に座る。

「由佳さん、言われたとこできたよ。丸つけて」

駿はそう言って由佳にノートを差し出す。男らしからぬ綺麗な丸っこい字で二ページが埋め尽くされていた。

「はいはるるい、今丸つけるからねるる。由佳はノートを受け取ると、答えを見ながら丸をつけていく。ボールペンの小気味よい音が部屋に響く。駿の解答は数問を除き全てが正解であった。充分に合格点である。

「うん、よくできてる。駿くんちゃんと勉強してるんだねるる。エライエライ」

由佳は満面の笑みで駿の頭を撫で回す。駿は顔を赤らめながらもじもじしていた。

「でもでも、ちよっち間違ってるところがあつたから。自分で直してみて? ここと、ここね。さあ頑張ってみよつか」

「うん、頑張る」

言う通りに問題に取り組み駿に、由佳の頬は思わず緩んでしまう。

懸命に勉強する駿が可愛くて堪らなかった。

そして、その安寧を突き崩すかのよう——

ぐぎゅう~~~~

え——と由佳は固まる。それは紛れも無くお腹の音であった。急速に腹部の膨満感が悪化し、鋭い痛みが広がっていく。

(う、ぐ、おおおっ……………)

由佳は顔を青ざめさせながら油汗を垂らす。そして、わずかに前傾姿勢をとりながらお腹を抑えた。その仕草から由佳の身に起きた惨事は歴然としていた。彼女は再びオナラがしたくなってしまうのである。それも先ほどのオナラを遥かに凌駕するほどの膨大な量のガスであった。

(ど、どうしよう……………どうしよう……………)

もはや、ガスの発生を憂いている暇すらなかった。あちらこちらに視線を向けながら由佳は大量のオナラを処理するための解決策を練る。脳みそを掻き回しながらひたすらに思考する。真っ先に思い浮かんだのは、何気なく立ち上がって再びトイレに行き、先刻のようにガスを抜くことであった。トイレに辿り着けば気兼ねなく思う存分にオナラを処理することができる。

しかし、わずかな時間の間に何度も何度もトイレでガス抜きをしていては、焼き芋を大量に摂取したせいで我慢できないほどの放屁欲求に苛まれているという事実が露呈し、駿にからかわれて赤っ恥をかくことは避けられないだろうし、そうなっては家庭教師としての威厳は——彼女にそんなものがあるかどうか分からないが——丸潰れである。それだけは絶対に阻止しなければならなかった。

それならば、と次に頭に浮かんだのは、この場でこっそりとオナラをしてしまうという手段であった。腸内の膨大なガスを『すかしっ屁』という形で処理してしまおうというのだ。

しかし、その手段も非常にリスクであった。もし、すかしの加減を間違えればオナラが暴発し、爆音を奏でしまうことになるし、仮にすかしっ屁に成功したとしても、その激臭により全てが台無しになる可能性も少なくない。今日のオナラがいつにもまして最悪だという

ことを知っている由佳は、そのケースを懸念せざるを得なかった。

よって、由佳に残された手段はもはや一つだけであった。それは我慢に我慢を重ね、ガスを封じ込め続けることよって、屁意が自然消滅することをひたすらに待つという手段であった。由佳は幾度か同じような窮地に立たされたことがあったが、どれも愚直な我慢によって無事に解決してきた。今回も例に漏れず、卓越した忍耐によって栄光への道は開かれるだろうと由佳はそう思ったのだ。彼女は肛門を力強く締め、より固い正座の姿勢を作った。

だが、由佳の行動は明らかに判断ミスであった。彼女は例え駿にガス抜きの実事を知られようとも、トイレに向かうべきだったのである。(う、く、ううううっ)

どれだけ我慢しても、オナラを逆流させたとしても、由佳の放屁欲求が治まることはなかった。むしろ、オナラを我慢しようとするストレスがさらなるガスを誘発し、彼女の腸は腐敗ガスでパンパンとなっていた。彼女のガスは外界に進出せんと、腸内で暴徒のごとく暴れまわる。少しの油断がガスの暴発に直結するほどの状態であった。

(も、もうダメ……やっぱり、と、トイレに……)

とうとう限界を悟った由佳はこの場で羞恥の塊を撒き散らすよりは、多少の恥じらいは許容して、トイレに向かうべきだとやっと意を決した。彼女は座布団から立ち上がるうとした。しかし、

ギョロロロ〜いもび〜い〜い!

「っ……!」

情けない音色を奏でお腹。そして、機を見るに敏とばかりに大量の屁が押し寄せる。由佳は慌てて体勢を元に戻すと、オナラの我慢に徹した。もはや、立ち上がることもままならぬ状態であった。それほどまでに、彼女は大量のオナラを溜め込んでしまっていたのだ。

(う、うっそお……どうしよう……)

お腹を抑えながら顔を真っ青にする由佳。進退窮まる状況とはまさにこのことであった。トイレに赴こうとすれば確実に爆音を漏らしてしまうだろうし、このまま我慢し続けてもいつか限界に達してしまう。彼女は腹部の圧迫感に苦悶しながらやっと後悔した。欲張ってあれだ

けの焼き芋を食べなければよかったと。

そして、数分後、由佳はとうとう我慢の限界に到達した。体内のガスが流動し、激流の如く肛門に押し寄せる。その衝撃に彼女の肛門は小刻みに痙攣した。

(あ、だめ、だめ……………ああっ、いやあっ!)

ブスッ ブスススッ しゅっしゅびいっ

「あっ、ああっ……………」

幸いにもすかしっ屁であったものの、とうとう由佳は駿の隣で放屁してしまう。彼女は思わず情けない声を漏らす。

「? 由佳さん、どうしたの?」

由佳の苦悶の声に駿は首を傾げる。

「い、いや、なんでもないよ。うん、だ、大丈夫だから。ほら、手が止まってるぞ。続き続きっ」

慌てて精一杯の笑顔を作ると、駿に勉強を促す。表面上では平然としているが、しかし、もはや一刻の猶予もない状態であった。一度放屁を許してしまったことにより、思うように肛門を締められなくなったのだ。由佳はお尻を揺らしてガスを封じ込めようとするが、何の意味も成さない。膨大なガスが流動し、放屁の予兆かのように肛門が痙攣する。

(も、もうだめ、出ちゃう……………こ、こうなったら……………)

肛門の限界を感じた由佳はやむなくこの場で放屁する覚悟を決めた。彼女は両手で座布団の端を掴むと、堤防のように臀部の後ろを包む。空気の逃走経路を遮断することによってわずかでもガスの拡散を防ぐうとしているのだ。

準備を整えた由佳は目を細めながらゆっくりと緊張を解いていく。針に糸を通すような慎重さで肛門をほんの少しだけ緩める。

そして、彼女は駿の隣でガス抜きを始めた。

「んっ……………」

ブスウウウウウウ~~~~~むむむむ~~~~~

~~~~~むっわあああ~~~~~

あまりの恥ずかしさに顔面を真っ赤にしながら由佳はすかしっ屁を放つ。肛門を慎重に精密に制御しながら、音が出ないように、尚且つ迅速にガスを抜いていく。驚異的な聴力によってやっと判別できるほどの微々たる音色が彼女のお尻から発せられ、その気体は肛門が火傷するのではないかと思われるほどの凄まじい熱気を孕んでいた。サーモグラフィで検出すればすぐに放屁の事実が発覚してしまうだろうと彼女は緊張事態に際しながらもそんなことを考えた。

「んっ、んんっ」

ぶすう~~~~~すう~~~~~ムッスウウウ~~~~~

~~~~~ぶしゅしゅ~~~~~

溜まりに溜まったガスを放出する感覚は得も言われぬ快感であり、由佳は思わず声を漏らしてしまう。それを隠蔽しようと、彼女は喘ぎ声に咳を合わせてなんとか誤魔化そうとする。その間も慎重を期して放屁する。放屁はなかなか止まらなかった。長い長いすかしっ屁が続く。

そして、それから十数秒の後、由佳はやっと放屁を終えた。彼女はホッとため息を吐くと、屁臭が漏れていないかどうかくんくんと鼻を鳴らして確かめた。

(……………うっ)

残念ながら、座布団で放屁の臭いをカバーするという由佳の作戦は失敗に終わった。彼女の屁は悲しいほどに臭った。座布団とお尻の間から屁が漏れ出していたのだ。ニンニクの不快な臭いがむうくと自身の鼻腔を刺激し、その臭さに涙が出そうになる。このままでは駿に自分の恥ずかしい臭いを嗅がれることは確実であった。

なんとか臭いを散らそうと、由佳は自分のテキストを手に取ると、涼むような調子で扇ぐ。屁臭漂うこの空気を自分の元に寄せようと試みた。

突然の質問に、由佳は思わず大きめの音を漏らしてしまう。全身が一瞬硬直する。彼女は冷や汗を垂らしながら駿の様子をちらりと伺うが、どうやら放屁の事実には気づいていないようで、彼は真剣な表情で質問の内容を話していた。

由佳はホッと胸を撫で下ろすと、駿の質問を聞きながらガス抜きを続行する。片手間による放屁は非常に難儀な所業であったが、しかし、そうせざるを得なかった。彼女の肛門括約筋はもうすでにその機能を成しておらず、とても放屁を我慢できるような状態ではなかったのだ。「でさ、この問題さ、この方程式を使えばいいの?」

「ん、んんっ (ブススッ ぶしゅっ)。そうね、その方程式で、 (ブスススッ ブススッ) 大丈夫よ、うん」

「でもなんか計算が合わないんだけど」

「え、え、どれどれ (ムヒュウッ しゅびいっ) う、うんんっ、ちよ、ちよつと見せてもらえるかな? (ススウッ むすうっ)」

「うん、この部分なんだけど……」

「え、とお (ブスッ ブススッ) ……、あ、あらあら、駿くんったら (むすすす むすすう) ン、んんっ、ほら、この計算部分が間違っちゃってるじゃない。全くもう、単純計算なんだから間違えないようにしないと (ポヒュウッ ブスッ すびいっ)」

由佳は受け答えをしながら幾度と無く放屁する。ムッチリとした肉付きの良いお尻をわずかにずらし、大量の腐敗ガスが駿の方向に流動しないように留意しながら、極めて静かに放屁する。そして、たまにテキストを扇ぎ空気を自分の方向に寄せ、駿の鼻に自分のガスが届かないように気をつける。わずかなぎこちなさもなくなかったが、放屁をしているとは到底思えないような自然な動作であった。

由佳の放屁は完璧に隠蔽されているはずであった。自身でも普段通りの自分を演じきれていると内心そう思っていた。

しかし――

「……ねえ、由佳さん」

「ん、ん? (ブスッ シュッ) な、にかな? また質問?」

「いや、そうじゃないんだけどさ……」駿は少しばかり逡巡するが、やがて、言いにくそうに話す。「由佳さん……我慢できないんだっからトイレ行ってもいいんだよ?」

「っ……! (ブススッ むすう) 」

はどのように由佳を慰めればいいのか悩んでいる様子であった。

由佳は目に涙を浮かべながら口を開く。

「う、うう、ごめんね。わ、私、ちよっとトイレに……」

この場から逃げ出すように、由佳は立ち上がるようにする。しかし、

ビキッ！

「あ……うあ……」

数千の針で刺されるような鋭い痛みが由佳の足に走る。しばらくの間正座の姿勢であったために、彼女の足は気づかぬ内に痺れていたのだ。由佳は思うように立ち上がることができずに、四つん這いの姿勢になってしまう。それも、駿にお尻を向けた状態で……。

「う、うそ……だ、め……だめ……」

由佳は必死に立ち上がるようにするが、彼女の意志に反して足が痺れて動かない。ビキビキと強烈な痛みが彼女の足を襲う。そして、運の悪いことに、この最悪のタイミングで屁意が急速に高まっていく。黄土色の気体が肛門に押し寄せる。

ブスッ ブフッ ぶっ

「そ、そんな……い、いやあ……」

全力で肛門を締めても尚、わずかなガスが漏出してしまふ。放屁という忌避すべき行為を余儀なくされる。膨大な放屁欲求を抑えるべく、由佳はお尻を揺らして対抗するが、それでも細切れなオナラが漏れてしまふ。そして、放屁量を遥かに上回るガスが猛烈な勢いで蓄積していく。爆音のオナラを漏らしてしまふのも時間の問題であった。それを指し示すかのようにお腹が獰猛な唸り声を上げた。

「うう、うい……」

今にも訪れんとしている醜悪な未来から身を脱するべく、由佳は動かない足を引きずりながら畳を這って進む。しかし、腕にも力を込めなければならぬため、必然的に肛門を締め付ける力が分散してしまふ。それを好機とみたガスは一気呵成とばかりに肛門を襲撃する。

「ああっ、いやあ……。だ、だめえ……。！」

慌てて肛門を締め直す由佳であったが、どうしようもなく手遅れであった。緩みに緩みきった彼女の肛門括約筋では、放屁欲求の大波を封じ込めることは到底不可能であった。腐敗ガスの凄まじい濁流によって脆くも砦は——崩壊した。

「い、いや、だめ、だめえっ……！ 出ちやううううっ……！」

ブビィィィィィッ！ フボッ！ ぶりびびびっ！ ぶむっっ！

ぶすっぴいっっっプウっっっっっ！

すかさずことすらできず、由佳はとうとう盛大な放屁を始めてしまう。足腰を震わせ、四つん這いで駿にお尻を向けながら、特大のガスを撒き散らす。スーツのスカート越しのくぐもった屁は耳を覆いたくなるほどに限りなく下品な重低音で、それと共に鼻のひん曲がるような強烈な悪臭が散布される。先ほどよりもさらに濃厚なニンニク臭、そして、発酵臭。頭がクラクラするような痛烈な香り。二人の居るリビング空間は瞬く間に彼女の屁に染まっていった。

ブバビッビィィッ！ プリリィッ！ ぶっぼおおおっっ

っっっ！ プウッ！ ぶぶっっっっっっっっっ！

「い、いやあ……。ああ、あああ……。！」

どうにかして放屁を抑えようと、由佳はお尻を艶めかしく揺らす。顔を真っ赤にしながら恥ずかしそうに体をくねらせる。しかし、当然ながらその程度の抵抗で放屁が治まるはずもない。自力で下半身を制御することも不可能で、肛門は勝手にその口を窄ませ、猛烈な腐敗ガスを延々と吐き出し続ける。その姿はあまりに滑稽であった。

その様子を駿は呆然と見続ける。由佳がオナラを漏らす様子をただただ見続ける。

「だ、めえ、駿くん……。お願い……。聞かないで……。嗅がないでえっ

音も大分控えめとなった。強烈な臭いであることは依然変わりなかったが、間抜けな音による精神的負荷はある程度軽減されたと言えるだろう。そして、彼女は幾十発ものスカシを連発した後――

ぶすっ……す、すっ……ぶしゅ、ぶう……

ぶすっ……

静かな屁を漏らし、最悪の演奏会はやつとのもので幕を閉じた。

訪れる静寂、渦巻く屁臭、耐え難い恥辱、頭をもたげる後悔。彼女の瞳は涙で濡れる。こんなことで泣いてはいけなさと自戒するが、それでも涙が溢れ出す。教師の威厳がどうしようよりも、駿に嫌悪されたであろうことが、由佳の心を強く締め付けていた。

濃密なオナラ臭は自身でも咳き込みそうになるほどであった。もはやニンニクの臭いどころではない。熟成に熟成を重ねたかのような、糞臭、ドブ臭、ゴミ溜め臭、納豆臭……とても可憐な美女が醸成するとは思えないような激臭が部屋に充満していた。

それほどの悪臭を放った本人である由佳はうつ伏せになったままなかなか顔を上げることができなかった。駿の失意に満ちた顔を見るのが怖くて仕方がなかったのだ。間違えても放ってはならないような下品な音色に、吐き気を催すほどの猛烈な屁臭。女性に憧れを持つ男子〇学生を失望させるには充分な要素であることには間違いないかった。

しかし、黙したままでは事態は好転しないと思い直し、由佳はゆっくりと顔を上げた。重苦しくのしかかる枷を引き摺ってでも、彼女は面を上げた。涙を腕で拭き、羞恥で朱に染まった顔を駿の方に向ける。さすがに彼の顔を直視することは難しかったので足元を見つめる。そして、口元を震わせながら話す。

「ご、めん……ごめんね、駿くん……わたし、どうしても、我慢できなくて……くさかった、よね……？ きたない、よね……？ ごめ、んね……」

羞恥に悶えながら謝罪するその様子は目眩がするほどに魅力的であった。突き出された豊満な臀部、恥辱に満ちた表情、その仕草には老若男女問わずに魅了する強烈な官能性が潜んでいた。

由佳は涙ながらに謝罪すると、「ご機嫌を伺うかのようにおどおどと視線を上げた。

そして、彼女は驚愕した。

「え——」

由佳は言葉を失い、目を見開く。それも仕方のないことだろう。彼女の視線の先にいた駿は、鼻息を荒げながら股間を大きく大きく膨らませていたのだから。

「はあ……はあ……」

明らかに興奮している様子の駿は鼻を何度も鳴らしながら部屋に渦巻く強烈な悪臭を嗅ぎとっていた。頬を染め、ペニスを勃起させながらひたすらこの獰猛な臭気を吸い込んでいた。もはや自制することすら不可能なのか、駿は悪臭の発生源たる由佳によるよると接近する。そして、そのまま彼は何の躊躇もなく——由佳のお尻に顔を埋めた。

「え、ええええっ!?!」

当然のごとく驚愕の声を上げる由佳。彼女にとって駿の行動は皆目意味不明であった。これだけの凄まじい悪臭を撒き散らしたその源に顔を埋めるなど、正気の沙汰とは思えない行動である。由佳は自分の放屁の臭いによって駿の頭がおかしくなってしまったのではないかと真剣にそう思った。

「スウー……スウー……」

駿はスカート越しに、由佳のお尻の香りを堪能する。当然ながらその臭いは強烈極まりないので、濃密過ぎるオナラ臭に充溢していた。常人ならば気絶しても何ら不思議ではない悪臭である。

しかし、駿は頬を火照らせ、ペニスを屹立させながらその臭いを思いきり嗅いでいた。まるで芳しい香りを楽しむかのように。

「ちよっ、しゅ、駿くん、だ、だめだよそんなの……く、臭いから……離れて……」

由佳はお尻を振って駿をお尻から離そうとするが、無駄な抵抗であった。駿は由佳のお尻の割れ目に張り付いたまま離れなかった。むしろ、彼女が抵抗すればするほど、さらに強く割れ目に顔を埋めて臭いを嗅いでいる様子であった。彼の鼻の感触が肛門に伝わるほどだ。

そして、その刺激に蠕動運動が活発化し、再び強烈な放屁欲求が募る。

「あっ、いやあんっ、ダメエツ……!」

がて、意を決して告白する。「ゆ、由佳さんのオナラ……すごく、いい匂いだっただ……」

「え……?」

「だ、だからその……もっと、か、嗅がせてほしいな……って思った……んだけど……」

「……い、いや、ちょっと、そんな」

由佳は駿の言葉に動揺を隠し切れない。

「だ、ダメだよそんなの……。いい匂いだなんて、そ、そんなわけないじゃない。こんなに……臭いの……」

自分の屁を臭いなどと形容したくはなかったが、事実、自分でも鼻が曲がるほどにそのオナラは強烈な悪臭を醸し出しており、その臭いは、彼女が今までに嗅いできたオナラの中で最も臭いオナラだと断ずるに些かの躊躇もないほどの悪臭であった。自分でも最も臭いと思うオナラがいい匂いであるはずがない。由佳は駿の言葉をどのように受け止めればいいのか分からなかった。

恥ずかしそうに俯く由佳に駿は言う。

「たしかに、臭いけど……でも、なんだか興奮しちゃうんだ。おかしいってのは分かっているけど、どうしても抑えられない……。あ、アソコもなんだか疼いちゃって……。も、もう出ちゃいそうなくらいで……」
「そ、そんなこと言われたって、私もどうしたらいいか……。うあっ」

ブツぶつ〜! ぶびびび〜!

もはや肛門の感覚もなくなっているのか、由佳は我慢すらできずに放屁してしまう。彼女の放った屁は室内の汚臭に加算され、さらなる濃密な悪臭空間が形成される。その恥ずかしさに彼女は目を強く瞑って震える。耐え難い羞恥に身も心も裂けてしまいそうであった。

「う……くっ」

由佳の放屁により、駿の性的興奮はさらに増大する。こんもりと膨らんだ股間は小刻みに痙攣し、彼の興奮度合いを如実に表現していた。このままでは、放屁の音と香りによって射精まで導かれてしまうことだろう。

「由佳さん……お、お願い……僕の顔に座って……お、オナラしてほしい」

「そ、そんな……そんなの……」

「お願い、だよお……僕もう……我慢、できない……」

「で、でも、オナラなんて……」

「由佳さん……お願い……」

「う、うう……」

由佳は口元に手を当てながら煩悶する。駿の顔に座って放屁するなど、想像するだけで羞恥の念に押し潰されそうになる。それも、限界の末の強制的な放屁とは違い、今度は自発的に放屁という恥辱行為に身を躰すのだ。臭いと分かっている自分のオナラを自ら駿に浴びせるなんて。どれだけ懇願されようとも、そんなことができようはずがない。

しかし、由佳はどうしても駿のお願いを却下することができないでいた。性欲のままに自分に継りつく駿はあまりにいじらしく、脳が蕩けるほどに可愛らしかった。そして、苦しそうに屹立する彼のペニスを、その肉欲を、どうにか処理してあげたかった。ドクン——と心臓が高鳴る。彼女の秘所はいつの間にか潤いを帯び始めていた。

そんなの……絶対にダメだけど……でも……

深淵に潜んでいた変態性が顔を出し、徐々に徐々に由佳の理性を蝕んでいく。そして、それと並行して再び放屁欲求が募っていく。肛門付近にガスが充填されていく感覚。絶好と言わざるを得ないタイミングであった。

駿のお願いを叶えてあげるかどうか、彼女は身悶えしながら逡巡する。しかし、その答えはもうすでに決まっていた。由佳の理性は牝としての本能に食い潰されてしまったのだ。

「わ、分かった……」由佳は声を震わせる。「オナラ……してあげる」

「ほんとう……?」

「うん……。顔に座って、そ、その……すればいいんだよね」

由佳の問いに駿は頷く。

「え、えーと、じゃあ……そ、そこで横になってくれる……?」

「う、うん」

言われるがままに駿は仰向けに寝転がる。彼のペニスの屹立がさらに強調される。

「ん、ふう……」

甘い吐息を一つ漏らすと、由佳は顔を火照らせながら地味な黒スカートを脱ぎ始めた。駿からそう提案されたわけでもないのに、婉然とした仕草でスカートを下ろしていく。単純に座りやすくするためだとか、腹部の圧迫感を軽減するためだとか、彼女の表層的な意識はスカートの脱衣を合理性の追求によるものだと認識していたが、その本質は全く異なっていた。由佳は駿に自分のあられもない姿を晒したかったのだ。そして、彼に喜んでもらいたかったのだ。彼女の秘所はますます湿り気を帯びていく。それと同時に彼女自身の肉欲も高まっていく。

スカートを脱ぎ捨てた由佳は寝転がる駿の腹部の傍に両足を添えるのと、ゆっくりと腰を屈めていく。彼の顔に狙いを定めるように、由佳のお尻は妖艶に揺らぐ。

「あ、ああ……」

その光景はひどく神々しいものであった。突き出された豊満な臀部、蠱惑的なベージュのストッキング、ストッキング越しに透き通った純白のレース、そして、それら美しい女体から放たれる強烈な屁の残り香。全てが強烈な興奮材料として機能し、駿を虜にしていく。破裂しそうなほどに心臓がうねり、鼻息が荒くなる。股間の疼きがさらに増大する。

「しゅ、駿くん……あ、あんまりじろじろ見ないで……」

自分でスカートを脱いでおいて、由佳は恥ずかしそうに腰をくねらせる。顔面騎乗という駿の要求を了承したものの、どうにもまだ踏み切りが付かない様子である。自分の臀部を押し付けて圧迫するのはやはり抵抗があるし、なによりオナラの臭いを直接嗅がれることが恥ずかしくてならなかった。彼女は中腰の姿勢でしばし迷う。

しかし、このままでも仕方がないと由佳はとうとう覚悟を決める。ごくりと生唾を飲み込み、駿に話しかける。

「い、いい……？　いくよ……？　く、臭いと思うけど、その……が、頑張っ……ね」由佳は恥ずかしそうに目を瞑り、そのままゆっくり腰を下ろしていく。そして、「……んっ」と彼女は駿の顔面に座り込んだ。

「……………ッ！！　ふむ、むうううっ」

顔面に広がる柔肉の感触、強烈な圧迫感、そして、脳を揺るがす濃

ラであった。

「ッ！！ ふむ、むぐううううううう！！！」

その臭いを嗅いだ駿はまるで打ち上げられた魚のように体を跳ね上がらせる。彼女の放屁は直接嗅ぐにはあまりに臭すぎたのだ。破壊的なニンク臭の後に、濁りきった便臭がねっとりと漂い、それから硫黄やチーズを混ぜ合わせたような臭いが猛烈な後味を残していく。脳天を撃ち抜かれたような衝撃に、駿の視界は黄土色に染まる。意識が朦朧と揺らぐ。

「で、出ちゃった……オナラ、こんなにたくさん……ああ……」

由佳はその身を震わせながら絶望に満ちた声で嘆く。漂ってくる臭いを嗅いだだけで、今しがた放ったオナラが強烈極まりないものだということは容易に察することができた。もうすでに何度も放屁している彼女であったが、やはり顔に直接放屁する恥辱は群を抜いて凄まじいものであった。あまりの恥ずかしさに再び彼女は涙ぐむ。

「駿くん……ご、ゴメン……すごいもの、出ちゃった……く、臭い？ 一旦、お尻どけた方がいいかな……？」

「ん、んんうううっ！」

否定の意志を示さんばかりに、駿は由佳のお尻をむんずと掴み、自身の顔面へとさらに引き寄せようとした。想像を絶するほどの悪臭であっても、彼の興奮は依然として鳴り止まなかった。

「しゅ、駿くん……そんなに……そんなに、私のオナラが……？ 私のオナラ、とっても臭いでしょ……？」

「ん、んんうううっ。んむぐうう」

「すごい……駿くんの……私のオナラ嗅いでもまだ、こんなに大きい……」

駿の屹立したペニスを見つめ、由佳は頬を紅潮させる。彼のペニスは苦しそうにズボンの中で暴れ回っていた。

「……ん、ふう」

由佳は吐息を漏らし、胸を高鳴らせながら駿のズボンに手をかけた。ゴムのズボンであったため、脱がすのは実に容易であった。ズボンから姿を現したのは、不自然な膨らみを形成した灰色のボクサーパンツだ。その先端は射精に先行する透明な液体で黒く湿っており、ペニスの亀頭が透過して見えた。

「こ、こっちも……脱がせてあげるね……」

興奮に声を上擦らせながら、由佳は駿の下着すらも脱がせてしまう。先端から糸を引きながら、彼の立派な剛直が露わとなった。彼のペニスは○学生男子のものとは思えないほどの大きさ、そして、硬さを誇っていた。太く猛々しくそびえ立ち、浮き出た血管は力強く、皮はすっかりと剥けており、まるでさらなる快感を求めかのように脈打っている。そして、じわり、じわりと先走り汁が先端から溢れ出している。

その光景を見て、由佳はごくりと生唾を飲む。彼女は今までに男性経験がなく、生で男性器を見たのは今回が初めてであった。だが、それほどの怯えはなかった。むしろ、興味津々といった様子であった。駿の男らしいペニスには女性を魅了する強烈な色香があり、由佳もその虜になってしまったのだ。彼女は蜜につられた蝶のようにペニスに手を伸ばす。

「えーと……こ、こうすれば、気持ちいいんだ、よね……？」

由佳は恐る恐る駿のペニスを右手で握ると、上下に扱き始める。太ましい肉棒をカウパー液で湿らせながら、ゆっくり丁寧に刺激を与える。彼女が腕を動かす度に駿のペニスは強く痙攣した。不得手な手淫ながらもその快感はあまりに強烈なものであったのだ。

「はあ……はあ……」

息を荒げながら由佳はさらにペニスを擦る。目つきをとろんと淀ませながら取り憑かれたように手淫を続ける。クチュクチュクチュクチュ——といやらしい音が室内を満たす。透明なシロップが次から次へと溢れ出す。

「むぐうっ。んむ、うううっ」

あまりに強烈な快感に、駿は腰を浮かせて悶える。ペニスの疼きはますます強大なものとなり、今にも爆発しかねないほどであった。膨大な射精欲求が彼の下半身を埋め尽くし、マグマのような熱と共に精液が射精管を昇り立つ。もはや射精は時間の問題だった。

「駿くん……すごい……透明なお汁がいっぱい出てくるよ……」妖艶な笑みを浮かべながら由佳は言う。「これ……気持ちいい？ ねえ、すごくいい感じかな……？ なんかピクピクしちやってるよ。あはは……ううっ」

うっとりとしてペニスを扱いていた由佳であったが、突然、彼女は苦悶の表情を浮かべる。腹部に生じる看過できぬ違和感。気づかぬ内に、


~~~~~

亀頭が裂けんばかりの盛大な射精であった。立派な肉棒が獰猛に脈打ち、先端から白濁色の子種を撒き散らす。内圧によって迸る精液は、まるで堰き止められたダムが決壊するかのような勢いだ。脳天を突き抜けるような快感に、駿は腰をガクガクと震わせた。前後不覚の意識の中で、ひたすら快樂に悶えるばかりであった。

「っ!? きやつ、きやあああっ!!」

飛び散る精液に、由佳は思わず悲鳴を上げる。直前の痙攣が射精の警告となっていたのだが、初めてペニスに触れた彼女がそんなことを知る由もない。由佳は回避することも叶わず、駿の雄汁によって汚されていく。艶かしいストッキングに、上半身のスーツに、そして、彼女の可愛らしい顔に——精液は母の胸に飛び込む子供のように飛びつく。そして、ほんのりと青臭い香りを放ち始めるのだ。

「やだ、すごい……。こんなにたくさん……。ああ……」

一瞬、飛び退きかけた由佳であったが、この現象が射精だということとを認識すると、いやらしい笑みを浮かべながらさらに強くペニスを扱いた。その扱きに伴って、精液はさらに力強く噴射され、純白の雫となって降り注ぐ。どれだけ精液に塗れようと、彼女はなかなか扱きを止めようとはしなかった。一滴残らず気持ち良く搾り出して上げなければ——由佳は駿のためにいじらしく奉仕する。

ジュルル……ジュルルジュルル……ジュルル……ジュルル……

どろお……………

やがて、相当量の子種を撒き散らし、駿の射精は治まった。飛散した精液のほとんどが由佳にへばりつき、彼女の麗しい黒髪でさえも白濁色のそれにより汚されていた。しかし、そんな状態でありながらも、由佳自身は満更でもない様子であった。

「ああ……。これが……。これが精子い……。ふふ、あつたかあい……」  
由佳は手足に付着した精液をうっとり眺める。これが駿の中で生

成された肉欲の結晶だと思うと、愛らしくて愛らしくて堪らなかった。彼女は雄汁でどろどろになった右手を口元に寄せると、臆することもなく舐め取った。そして、味わうかのように幾度か咀嚼すると、やがて、精液を嚥下した。本来、精液の味はひどく苦いものなのであるが、彼女にとっては芳醇で甘美な味わいのように感じられたのだ。

「ん、んふ……ここ……綺麗にしてあげる……」

由佳は顔を股間に近づけると、今だ屹立している駿のペニスをしゃぶり始めた。ペニスを染める白濁を触手のような舌で舐っていく。舌を回転させながら亀頭、そして、肉棒を抉り、ほんのわずかの精液も逃さずに洗浄する。駿のペニスは一口で頬張りきれほどの大きさではなかったたので、根本部分は側面からのフェラで対応した。粘着質な音が室内に響き渡る。

「ぶちゅ、ぬちゅう、はあ、むう……んっ、ぐちゅ、ちゅっびい、じゅるるっ」

まるでぬるま湯に浸るような快感が駿の下半身を支配する。その快感にペニスが反応しないわけがない。射精により半勃ちになっていた彼のペニスは瞬く間にその硬さを取り戻し、やがて、立派で剛健な塔に変貌した。地割れのような血管がビキビキと浮き出していた。

ペニスに纏わりついた精液を舐めきった由佳はごくりと甘汁を嚥下すると、ぬぷりと口から肉棒を抜いた。そして、屹立したペニスをにやにやと眺める。

「ああ、駿くんのチンチン、また大きくなってるう……ふふっ、私の、ふえ、フェラで興奮しちゃったのかな？ うふふ……」

由佳は楽しげに駿のペニスを人指し指でつつく。その硬度はあまりに硬く、まるで鉄棒をついているかのようであった。

「ねえ駿くん……またイキたい？ どろどろのやつ、またいっぱい出したい？ ぴゅっぴゅっぴゅう……って、出したいよねえ」

「ん、んむう……」

由佳の問いかけに対して、駿はまともな答えを返せずにいた。今だ射精による快樂の余韻に身も心も浸ったままで、気絶と覚醒の間を右往左往している状態であったのだ。彼は譫言のような呻き声を漏らすばかりであった。

「ねえ、ねえ、駿くん……。答えてくれなきゃわかんないよ……ねえ……」

由佳は豊満な臀部を揺らして駿に解答を催促する。しかし、それでも音沙汰がない。

「もお〜。こうなったら………ふんっ」

**ブポツッ！ ブブウ〜〜！！**

腹部に力を込め、由佳は自らの意志で放屁した。腸内には放出するためのガスがたっぷりと充満していたので、軽く力むだけで放屁することができた。

「むぐっ！ うむううううう〜！！」

由佳の屁の臭さに、駿の意識は瞬く間に引き戻された。彼女のオナラは何度嗅いだとて慣れぬ悪臭であった。視界が真っ黄色に染まるかのような濃厚なニンク臭に彼女独特の妖艶なオナラ臭が混ざり、脳を揺さぶる激臭が完成されている。駿はその悪臭に悶えながら体を跳ね上がらせた。

そして、それと同時に駿の性的興奮もせり上がる。彼のペニスはその興奮を指し示すかのように小刻みに痙攣していた。そして、次なる射精の準備を着々と進行させていた。

「あはっ、私のオナラでチンチンがピクンってなっちゃったねえ。うふふっ、やっぱりピュッピュッピュしたいんだね。もう、駿くんのエッチい」由佳はお尻を揺らし、屁の臭いを擦りつけながら言う。「いいよお。今度はおお〜〜と気持ち良く出させてあげるから………ねっ」

完全にスイッチの入った由佳は鼻息を荒らげて駿のペニスを扱き始めた。一度目の手淫によってある程度コツを掴んだのか、その手つきは中々に巧みなものであった。自身の唾で円滑となったペニスをクチュクチュクチュクチュ——と強めに上下に擦る。すでにペニスに対する遠慮や躊躇はなかった。自分の手コキによって駿が歓喜していることを確信していたからだ。

そして、手で扱いている間もガスが溜まる。もはや、放屁に羞恥を感じることもなくなっていた。由佳は待ってましたとばかりにほくそ笑む。

「駿く〜ん、君のだ〜いすきなアレがまた出ちゃうよ〜。よく堪能するんだよ〜」





まに射精することができなかった。幾度かの痙攣の後、彼の下半身を包んでいた絶頂の予感はどこかへと消え去っていった。

「ふうっ、アブナイアブナイ。もう少いでピュッピュさせちゃうところだった。ふふっ、駿くんのチンチンってホント分かりやすいね。出ちやうよろうって時にビクビクってけーれんしてるんだもの。太っちょチンチンが仇になったね。ぷくくっ」

由佳は焦らすように亀頭の先を人指し指でなぞる。まるで水を含んだスポンジを押したかのように、駿のペニスから我慢汁が溢れ出す。

「ねえねえ駿くん、このままピュッピュしてもつまんないからさあ。ちよっちゲームでもしない？」由佳は薄っすらと微笑みながら言う。

「これから駿くんにお勉強の問題を十問出します。それに一問でも答えられたら駿くんのお望み通りに射精させてあげる。もし全問不正解だったらお射精はずっとおあずけです。自分でシコシコして虚しく処理してねっ。解答は、と……はい、右手に持たせてあげたそのペンで下に敷いたノートにつらつらって書いてね。時間制限は三十秒以内。私のお尻でなくんにも見えないけど、そこはちよっとしたハンデってことで。あ、あと、一問間違える毎に罰ゲームだから、そこんとこヨロシク。まあ普段からちゃんと勉強してる駿くんなら余裕だと思うから、ちやちやって答えちゃってねっ。さあ、きもちいいピュッピュ目指してガンバリましょろねろ。いえろろろい」

由佳は楽しげにお尻を揺らしているが、駿にとっては一大事であった。このまま射精できずに生殺しにされては堪ったものではない。由佳に気持ち良く射精させてもらうには、絶対に一問でも正解しなければならぬ。自分の学力に自信のある彼であったが、自然とペンを握る手に力が入る。それはまさに緊張の表れであった。

「それじゃ早速、第一問。ババン！ えろとお、まずは確率の問題ね。ここに1、2、3、4、5、の五枚のカードがあります。これらから一枚取り出し、もどしてもう一枚取り出す時、二枚の数の和が奇数になる確率を求めなさい。はい、よろいスタートお！」

その問題は駿にとって歯牙にもかけないほどの簡単な問題であった。奇数ということは一枚目が奇数で二枚目が偶数か、一枚目が偶数で二枚目が奇数ということだから……と彼は頭の中で計算する。そして、即座に答えを導き出した駿はノートに解答を記そうとする。やった、これで気持ち良く射精することができる、と彼は喜んだ。しかし、

「……それっ、ピコーーーーーンッ」  
「ッー！」

突如駿を襲った股間への衝撃。駿が答えを記すのに先んじて、由佳はなんと彼のペニスにデコピンを浴びせたのだ。駿が解答できないように妨害工作に及んだのである。度し難い衝撃に先端から我慢汁が迸り、駿は腰を震わせる。あまりに強烈な快感に頭が真っ白になり、駿はペンを落としてしまう。

「っ！ んむううううっ！」

ペンを零した駿は慌てて周辺を手探り、なんとかペンを取り戻す。由佳に対する怒りがなくてもなかったが、時間はまだあると気を取り直し、彼は解答をノートに書こうとする。

しかし、駿の手は動かなかった。ノートに答えを書くことができなかった。先ほどの衝撃により、彼は解答のみならず問題の内容すら忘れてしまったのだ。彼は必死に思い出そうとするが、影も形も現さない。その記憶は深淵に埋没してしまった。

そのまま無情にも時間は過ぎていき――

「は〜い、残念。時間ぎれ〜」心底楽しそうに由佳は言う。「全く、こんな問題も解けないなんて、由佳先生は残念でならないよ。駿くんにはもっともお〜と勉強が必要みたいだね。うふふ、せいじゃあ早速だけどバツゲーム。ま、大体予想はついてるだろうけど……」

由佳は微笑みながら臀部で顔面を圧迫する。肛門の位置を駿の鼻にセット。そして――

「いくよ、駿くん………ふんっ！」

**ブッ！ ブブウウ〜！！**

野太い音色が二発、駿の眼前で炸裂する。当然ながらその正体はオナラである。濃厚な悪臭が凄まじい勢いで鼻腔に渦巻き、駿の意識を丸ごと吹き飛ばそうと跳梁する。あまりの臭いに彼は白目を剥いた。

駿にとって由佳の放屁はご褒美なのではないかとも思われるが、その実、充分過ぎるほどの罰ゲームとして機能していた。いくら屁の臭

いを嗅ぐことにより性的な高揚を得たところで、ペニスへの刺激がなければ絶頂に達することはできない。つまるところ、生殺しの状態が悪化の一途を辿るのである。由佳は駿の気持ちを察した上でこの罰ゲームを設置したのだ。

「うふふ〜どうかな、私のオナラの味は？ とっても臭くていい香りでしょ〜？ よかったね〜由佳先生のくっさあ〜いオナラを嗅げて。とろけちゃいそうになるほど幸せでしょ〜？」

由佳はいやらしい言葉によって駿の情欲をさらに煽る。駿のペニスは射精を求めるかのように獐猛に蠢いていた。

「さて、それじゃあ第二問にいきましょう。つぎは、それじゃ日本史の問題ね。え〜と、一三三四年に、建武の新政を執り行ったのは誰でしょうか！」

これも本来の駿からすれば反射神経で答えられる程度の実に簡単な問題であった。しかし、今しがた強烈な放屁を浴びた彼にまともな思考ができようはずもなく、そもそも、意識をひどく朦朧とさせているため、由佳の問題の内容を把握することができていなかった。それほどまでに駿は疲弊していたのである。

「は〜い、また時間切れ〜。も〜この前やったばかりじゃない。どうしてこんな問題もできないかな〜。正解は後醍醐天皇だよ。もっつ、由佳先生はぶんぶんだよ〜。この怒りを込めて〜……………ふんんっ！」

**ぶちゅびいっ！ フプウ〜〜〜！！**

そして、躊躇なく放たれるオナラ。相変わらずの勢いと、鼻がもげるかのようなニンニク臭。視界に真っ黄色な靄が立ち込め、駿は汚臭空間に幽閉される。どこもかしこもオナラの臭いで充満しているそこはまるで彼女の腸の中のようなものである。

もはや、駿に問題を答えられる能力など残されていなかった。怒涛の放屁が続く。

「はい、時間切れ。オナラぶ〜」**ブスッ** **ブピッ** 「はいダメ〜。それじゃあくっさいオナラを嗅ぎましょ〜ね〜」**フウ〜〜〜ブピィ〜〜〜**  
「も〜ホント駿くんはダメダメなんだから。私のぶ〜で頭を冷

やしなさいっ」**むっぶすっ**」**あはは**っなんだかぐったりしてきちゃったね。でもやめてあげないよ。くっさいオナラでゆでダコになっちゃえ」**フビッ フビュビッ!**「ううう、私のオナラくっさあ。駿くんが頑張らないからこの部屋オナラ臭くなっちゃったよ。もおうちやんと嗅いでよ」**ぶむっ!** **ぶすびっ!**「ほら、もう八問目だよ。大変だね。あと二問しかないね。あはははっ」**ぶちゅびゅむすっ**「うわ、駿くん大ぴんち、ラスト一問だあ」**フボビッ! フスッ!**

そんな調子でとうとう九問目が終了した。残すところはあと一問。次の一問に正解せねば、由佳の施しを甘受することは叶わない。万事休すとはまさにこのことである。

しかし、駿の意識はもうすでに消失寸前であった。いくら由佳のガスを好いている彼とはいえ、度重なる強烈な放屁責めに体力が底を尽きかけていた。かろうじてペンを握っているものの、その手はわずかに痙攣するばかりだ。ノートにはミミズがのたくったような字が散乱していた。彼の苦悶していた様子が如実に表現されていた。

「あはは、駿くんどうするの? 次の問題で最後になっちゃったよ? 大丈夫? まだ生きてる?」

まるで心配してなさそうな声で駿の安否を確認する由佳。自分のオナラによって教え子を瀕死の状態へと追いやっているにもかかわらず、彼女の気分はこの上なく高揚していた。以前は恥辱に悶えながら屁を漏らしていたというのに、今では放屁行為に悦楽を覚えるほどの変態性を獲得していたのだ。

「そいじゃあ、ぐっでんぐでんになってるところ悪いけどお、最後の問題いっちゃうよ。最後の問題はマルバツクイズね。合ってると思ったらマル、間違ってると思ったらバツをノートに書いてね。分かった? 分かったあ?」

由佳は尻を揺らして駿の反応を伺う。了解の印なのか、駿は震える腕をなんとか上げた。

「よしよし。よく分かかってるみたいだね。合ったらマル、間違ったらバツ。オッケー? それじゃあ、えーと……さ、最後の問題ね。ん、んん……」

恥ずかしそうにもじもじと体を揺らし、由佳は紅潮した頬をさらに赤く染める。どうにも問題の内容を駿に告げることにためらいを感じ

ているようだ。

「最後の問題……最後の問題はね……………」

由佳は口元に手を当て逡巡する。頭に響くほどに心臓の音はやかましく、このまま焼け爛れそうなほどに体が熱い。このような感覚は彼女にとって初めてであった。

そのまま甘ったるい沈黙が続き、やがて屁の香りも薄まりつつあった頃、ようやく由佳は俯きながら口を開いた。

「……ゆ、由佳先生は、駿くんのこと……だ、大好きである。……マルか……バツか……」

由佳は小声でそう告げた。

駿の腕はゆっくりと、しかし、確かな意志をもって動く。

指先のわずかな力が伝導し、ペンは薄っすらとした線を引く。

彼がほとりとペンを落とした時、手元のノートには——マルが描かれていた。

それを見て、由佳は満面の笑みを浮かべる。

「駿くん、おめでとう！ 最後の最後でなんと大正解だよ！ そう、由佳先生は駿くんのごことが大好きなのでした〜。よく分かったねえ、駿くん。あは、あはははっ……………ははっ……………」

由佳は駿のペニスに顔を寄せる。

「はあ……………はあ……………駿くん……………スキ……………大好きだよお……………どうしよう、私、頭オカシクなっちゃったかも shouldn't……………ああ、駿くんのチンポお……………んうっ、今から気持ち良くさせて、あ、あげるからねえ……………んむっ」

我慢しきれなかったかのように、由佳はペニスの亀頭部分を咥え、肉棒を両手で扱き始めた。亀頭を飴のように舌で転がし、祈るように指を重ねて駿の巨大な竿を上下させる。

「ふむうっ！ んんうう……………！！」

突如訪れたペニスの感触に、駿の腰は跳ね上がり、しなやかな手足は痙攣を引き起こす。その様子はまるで通電された蛙のようであった。寸止めにより射精の準備は万端であったため、すぐさま耐え難い衝動が湧き上がる。

「んぶ、ぐちゅぐちゅ、ん、あっ……………駿くん、出るよっ」

由佳はペニスから口を離し、駿に告げる。そして、返答を聞くまでもなく、肛門の戸を開いた。

**ブブブウ————！！　フウ〜ピリリリリッ！　ブボボボッ！  
ブバズッ！**

由佳の放屁はさらに猛烈な勢いで噴射され、駿の顔面を徹底的に燻す。その激臭は彼女が放ってきたオナラの中で最も強烈な香りであった。史上最底級のニンニク臭に、糞便臭や納豆臭がブレンドされ、腐卵臭、ゴミ溜め臭が小粋なスパイスを演出している。スカンクのオナラ、いや、それすら凌駕するほどの臭いであるかもしれない。常人であれば気絶どころか、失神と覚醒の往復により発狂してしまう可能性すら危惧されるだろう。人外と称すべき最悪のオナラであった。

しかし、それほどの悪臭であろうとも、駿は嬉々として鼻を鳴らした。彼の鼻はもうすでに壊れていたのかもしれないし、そもそも脳に異常が発生していたのかもしれないが、彼にとって由佳のオナラは今だ愛すべき芳香であった。精神の崩壊を招きかねない激臭であろうとも、嗅がずにはいられないのだ。条件反射と言っても過言ではないだろう。

「ぶちゅ、ぬちゅ、んん、ぶ、ちゅっびィ、ああっ、らめえ、オナラ止まんないよお……………」

**ブスウツッ！　ぶつぷうう〜〜！　ブオンツッ！　ブボツッ！　バズツッ！**

**ぶすつぷうう〜〜！！　プピィッ！　プビィィィッ！**

由佳の放屁は留まるところを知らなかった。大砲のようなオナラが間断なく噴射され、パンストによって密閉されているがために漏れ出すことなく駿の鼻腔に充滿する。次から次へと満たされる新鮮なガスに彼は連続で体を躍動させる。濃厚過ぎる臭いに脳みそまでが黄色く染まっていくかのようであった。

「ぶちゅっぶちゅっ、じゅるるっ、じゅっじゅびいっ、ぶじゅうぶじゅるるっ」





「アレ？ 駿くん、どうしたの？」

「……………」

「あれ、駿くん、駿くんっ！？ 大丈夫!？」

由佳は慌てて駿の肩を掴んで揺さぶるが、彼にまるで反応はない。どうやら絶頂の快楽と痛烈なガス臭に意識を朦朧とさせていたところに、とどめの一発を嗅がされたことで駿は気絶してしまったようだ。駿は安らかな顔をしたまま目を閉じ、ピクリとも動かなかつた。

「や、やば…………どうしよう…………」

濃厚な屁臭漂う空間において、由佳は一人途方に暮れるのであった。

そして、禁断のオナラプレイから数日が経った。

結局、二人の行為は奇跡的に駿の母親に露呈することなく、いつも通りの日々が恙無く送られていた。

しかし、当然ながら二人の関係は変質してしまったようで――

「…………駿くん？ これはどういうこと？」

「い、いやあの…………は、はは…………」

由佳はジト目で駿を見つめ、駿は視線を少し逸らして頭を掻く。二人の前にあるテーブルの上の皿には、焼き芋がこんもりと乗せられていた。『どうか食べてください』と言わんばかりである。

「ちよっとさすがに露骨過ぎるんじゃないかな？」

「う、うう…………」

「そもそも私達って教師と生徒の関係なんだよ？ あんまりそーゆ

ーことするのってよくないと思うんだけどな〜」

「……………」

駿はもじもじと体を揺すりながら黙って俯いてしまう。その姿を見るとどうにも母性本能をくすぐられ、由佳は彼が喜ぶように配慮してしまうのだ。彼女は「はあ…………」とため息を吐いてから、目の前の焼き芋に手を出した。そして、大口を開けて焼き芋を頬張った。

「はぐっ、んぐモグモグ…………んんう」

「ゆ、由佳さん…………」

「い、言っとくけどアレ、だからね」由佳は咀嚼しながら続ける。「昨日友達と焼き肉食べに行ったから、その…………かなりクサイからね！ 覚悟しなさいよっ!」

「う、うんっ!」

「ほ、ほらっ、早く問題解いちゃいなさいっ。終わらないとシ、シてあげないからね」

「うんっ!」

駿は元氣よく返事をし、一気呵成とばかりに問題に取り掛かる。あの日から駿はさらに勉強に精を出すようになっていた。それもこれも全て、由佳のオナラを嗅ぐためであった。彼のペニスはすでにギンギンにそそり立っていた。それは衣服越しからも容易に認識できるほどであった。

「全くもう………家庭教師も楽しやないなあ」

由佳はそう言いながらもつついっつい微笑んでしまうのであった。